



撮影：西山芳一（表紙、並びに当ページ）

## 本庄水源地堰堤水道施設

広島県呉市焼山北

広島県呉市を貫流する二河川の上流。その住宅街の一面に石積みみのダムが鎮座する。一九九九年に、稼働する水道施設として初めて国の重要文化財に指定された本庄水源地堰堤水道施設の中核施設となる堰堤だ。

この水道施設は今こそ呉市の水道施設の要として市民の日常生活を支える水瓶だが、元来は旧日本海軍の呉鎮守府によって軍用水道施設として整備されたものだ。背景には鎮守府が置かれたことにより逼迫した用水の確保がある。一九一二年に着工し、第一次世界大戦の最中、一九一八年に稼働を開始した。呉鎮守府は海軍工廠で、戦艦大和が建造された軍用拠点として知られている。堰堤の堤高は二五呎、堤長九七呎。完成当時この水道施設は東洋一の規模を誇った。重力式コンクリート造、全体を覆う石積みの装飾が他のダムには見られない優雅さを放っている。

軍用施設にはありがちなことだが、詳細な工法などを伝える資料はほとんど残されていない。ただ、設計施工には「水道の父」と謳われる吉村長策、横須賀四号ドックなどの水源施設と約一〇キロに及ぶ送水施設の工事に関わった井上親雄、名古屋市の大街路網計画を立案した飛山昇治らが名を連ねる。六年を要した施設整備には延べ約一七〇万人が関わり、死者一五名、負傷者二五〇名以上を数えた。更に井上と飛山は竣工の前年に疾病、神経症を理由に辞職していることからその工事の過酷さは容易に想像できる。

敷地内には桜、松の植栽が施されている。その毅然とした景観が、大戦中にあっても東洋一となる巨大インフラを築造するにあたり、意匠性にもこだわった土木技術者たちの凜とした矜持を脈々と伝えている。



堤体は御影石の布積み、12m間隔で設けられた堤体を保持する縦帯、高欄部分が外側に張り出すように積み上げられた堤頂部の構造など、機能性と美観が見事に調和する意匠が目目を引く。堰堤をはじめ丸井戸、第一量水井、階段などを含め国の重要文化財に指定された。鑄鉄製の配管、仕切弁なども残されており当時の土木技術の粋を今に伝えている。